

栃木県下野市御鷺山古墳の小札甲 - 2列円頭形と1列偏円頭形の組み合わせ -

うち やまとしゆき
内山敏行

はじめに	4 2群小札の特徴
1 御鷺山古墳について	5 その他の小札など
2 御鷺山古墳出土小札の概要	6 位置づけ、組み合わせの性格
3 1群小札の特徴	おわりに

墳長85mの前方後円墳から出土した古墳時代後半の鉄製小札を再報告・検討する。鍼孔1列偏円頭形の附属具小札には肩甲（袖甲）の部品があり、膝甲なども含む可能性がある。鍼孔2列円頭形小札はおそらく甲の本体小札で、鍼孔4個の小札は草摺部。鍼孔5個の小札は脇部の可能性が高い。「富木車塚型」または「金鈴塚型」の小札甲か、その関連型式と考える。後系の2列円頭形小札甲に、外米系の1列偏円頭形小札附属具を組み合わせる事例と推定した。外米系附属具を優で製作した工人、あるいは舶載品の存在、使用者と朝鮮半島社会との関わりなどを考えてゆく必要がある。

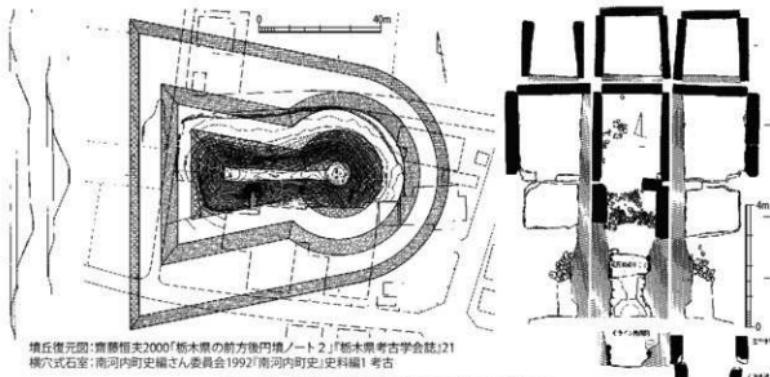
はじめに

栃木県下野市教育委員会が保管する御鷺山古墳出土の鉄製小札を再報告する。発掘調査と報告の時点では形状や孔をよく確認できなかった資料が、錯落としによって観察できるようになることはよくあり、これもその事例である。樹脂合浸処理は行われていない。市町村が合併する前、今から30年以上前の出土資料で、X線写真的有無もよくわからないが、現状で観察できる情報を報告する。

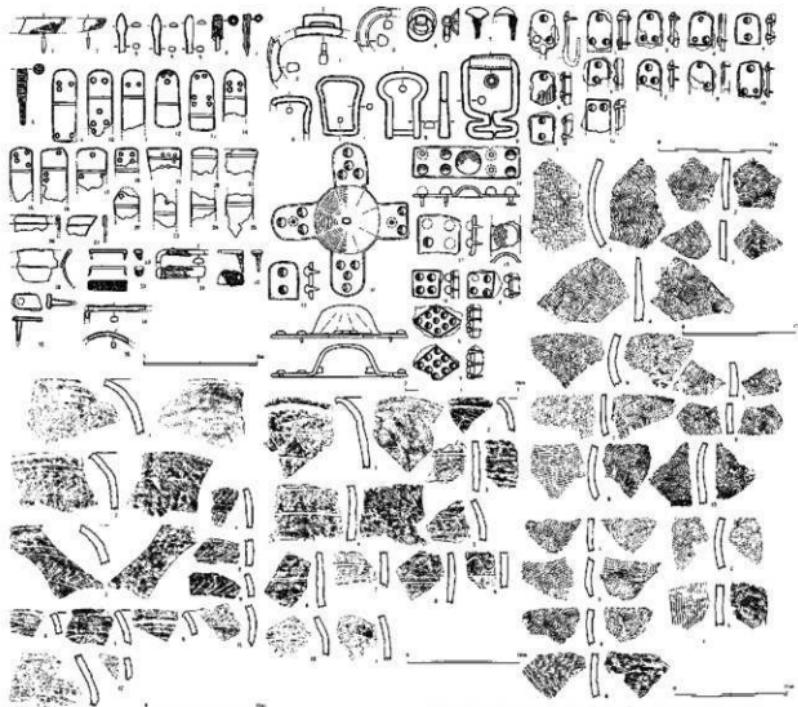
1 御鷺山古墳について

御鷺山古墳は、栃木県下野市薬師寺に所在する古墳後半の大形前方後円墳である。墳丘周囲の工事立会結果をもとに検討した齋藤（2000）により、墳丘長85.0m、後円部径53.5m、後円部高7.3m、前方部高6.4m、第一段平坦面幅4.5～7.0m、周幅9.5～10.0m、周幅を含めた総長が104.5mで二段築成と復元されている（第1図左）。『南河内町史』編纂にともない、前方部に所在する凝灰岩切石一枚造りの横穴式石室（第1図右）周辺が調査されて、小札、馬具（大型矩形立聞造素環櫛・釣金具・辻金具・帶飾金具・しおで・鞍飾鉢・かこ）、鐵鐵、刀子、小形鏡、須恵器甕（第2図）、円筒・形象埴輪片が出土した（南河内町史編さん委員会1992）。

下野市石橋・薬師寺地域の首長墳が、石橋横塚古墳（墳長75m・6世紀後葉）→御鷺山古墳（墳長85m・6世紀末～7世紀初頭）→下石橋愛宕塚古墳（墳径82m・7世紀初頭）→多功大塚山古墳（辺長53.8m・7世紀中葉）→多功南原1号墳（辺長25m・7世紀末）の順に造られたことでは、意見が一致している（秋元2015a、小森2015、栃木県考古学会2016、佐藤2019）。ただし、半世紀の年代差がある愛宕塚と大塚山の間に系譜関係がない可能性も考えられている（小森2015, p.107; 佐藤2019, p.92）。一方、広瀬和雄は、御鷺山と石橋横塚の築造順序を逆に考えている（広瀬2019, p.375）。下野薬師寺のすぐ北に所在する御鷺山古墳



第1図 御鷺山古墳の埴丘復元図と横穴式石室



第2図 御鷺山古墳の副葬品と須恵器破片

の被葬者は、薬師寺を造営した氏族の始祖の存在として顕彰される存在で、初代下毛野国造の可能性が高いとみる意見がある（若狭 2018, pp.293-295）。

御鷺山古墳の馬具と小札甲を、後期第4段階（須恵器のTK209 型式並行期）に筆者は位置付けた（内山 2011, p.60）。そして、「下野市御鷺山古墳に鍼孔2列の円頭形小札があり、幅が狭くて下掘孔2個の小札が認められるので「小針鎧塚型」の新段階に該当する。石橋横塚古墳と同様に鍼孔1列の偏円頭形小札も含むと考えられる」と紹介した。“小針鎧塚型の小札甲で、下掘孔2個の小札を含む”というこの認識は誤りで、今回の報告で訂正する。御鷺山の円頭形小札は、富木車塚型か金鈴塚型（清水 1993）の新段階で、甲本体の小札の下掘孔は3個である。小札幅が狭いので後期第4段階に位置付ける点は、訂正の必要がない。

御鷺山古墳の埴輪について、秋元陽光（2015a, 2015b）は蛍光X線胎土分析結果を検討して「非唐沢A群」つまり推定宇都宮北部地域産の可能性を示す一方で、群馬県太田市駒形神社埴輪窓跡の分析値と共通する可能性も十分あると述べている（秋元 2015a, p.111）。他の「非唐沢A群」よりも御鷺山古墳の埴輪はSr（ストロンチウム）とFe（鉄）の分析値が高い。埴輪から下野系須恵器大甕（第2図下）へと埴墓祭祀が移つてゆく過渡期の御鷺山古墳に、地元でなく上毛野から埴輪を調達した可能性があるのならば、興味深い（佐藤 2019, p.93）。

2 御鷺山古墳出土小札の概要

御鷺山古墳で出土した鉄製小札は、小札甲の本体部分に使用した鉄製小札と、附属具小札の両者を含む可能性がある。胃の地板や鋸・頸当と確実にいえる小札はない。附属具は複数の種類があり、その中には肩甲（袖甲）も存在するほかに、大形小札を使った附属具もある。

小札は、大きく分けて3群、さらに分けると7種ある（第3図）。主に小札甲の附属具に使う可能性がある鍼孔1列・偏円頭形小札を1群、長6.4cmで小札甲の本体に使う可能性がある鍼孔2列・円頭形小札を2群、用途不詳の鍼孔2列・偏円頭形小札を3群とした。

1群は、札幅と使用部位を考慮して中別で1類～3類に分類し、1類を第3鍼孔のないもの（a種）とあるもの（b種）に細別分類した。2類と3類も、第3鍼孔の有無で細別分類できるかもしれないが、資料数と残存状況が限られるので不明確である。

2群は、中別では4類に該当し、使用部位を考慮して4類a種と4類b種に細別分類した。2群は小札甲の本体に使う可能性が高いので、2群の中には4類の他にΩ（オメガ）字型腰札やΩ字型裾札も存在したであろうが、出土した小札数が少ないので確認できない。3群は、1点だけ認められた鍼孔2列・偏円頭形小札で、中別では5類に該当する。

分類名称の1類a種は、頭部形・大きさ・覆輪孔に基づく略称を「偏円5.2下孔」とする。他の種も同様の原則で第3図のように分類した。

1類は長5.2cmで、小札甲の附属具である肩甲に使う偏円頭形小札と見られる。「腕甲」（初村 2015, p.267）や「袖甲」（初村 2018, p.63）とも呼ばれている。2類と3類は、1類と同様に鍼孔1列・偏円頭形であることから、小札甲の附属具と推測する（ただし、4類とは別のもう一領の小札甲の本体部品とみることも、不可能とは言えない）。4類は、小札甲の本体に使う可能性が高い。5類は性格不明である。

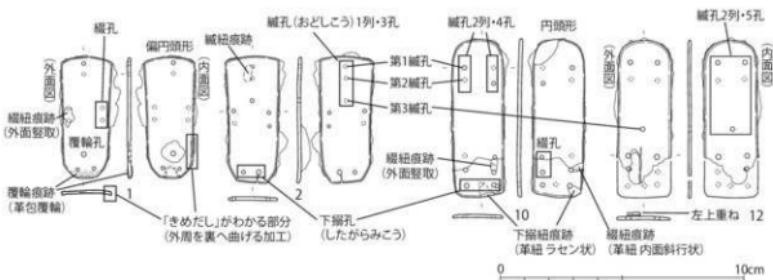
3 1群小札の特徴（第5図1～9、第4図1・2）

【小札の形状・大きさ】上縁は偏円頭形で、下縁は開切方形。縦断面形は、裏面方向に緩く反る「撓め」を持つ。

群	1群(縫孔1列・偏円頭形)			2群(縫孔2列・円頭形)		3群(縫孔2列・偏円頭形)
類	1類 (長5.2cm・幅1.9cm)	2類 (幅2.1cm)	3類 (幅2.7cm)	4類 (長6.4cm・幅2.1cm)		5類 (幅1.9cm)
種	a種 (覆輪孔有)	b種 (第3縫孔有)	(第3縫孔の 有/無不詳)	a種 (第3縫孔無)	b種 (第3縫孔有)	
略称	偏円5.2 下孔	偏円5.2 中央孔	偏円 幅2.1	偏円 幅2.7	円頭6.4 中央無孔	円頭6.4 中央孔
事例						
	(破片図を合成)					
長・幅 (cm)	長5.1-5.3 幅1.8-2.0	長5.1-5.3 幅1.8-2.0	推定長7-8? 幅2.1-2.3	推定長8-9? 幅2.7	長6.4 幅2.1	長6.4 幅2.1
縫孔	2孔×1列	3孔×1列	3孔×1列 2孔×1列	3孔×1列 (2孔×1列?)	2孔×2列	2孔×2列 +1孔
縫孔	1段(2孔×2箇所)		推定2段(2孔×4箇所)		1段(2孔×2箇所)	
下掘孔・ 覆輪孔	下掘2孔+ 覆輪1孔	2孔	2孔	(残存なし)	3孔	
用途	肩甲(袖甲)		附属具(推定)		甲本体(推定)	
使用 部位	裾札 (最下段)	上段・ 中間段			草摺?	胴部?

第3図 御鷲山古墳出土小札の分類 (S=1/2)

0 10cm



第4図 小札の部位と付着痕跡の用語説明 (S = 1/2)

0 10cm

両側と頭部の縁を裏面側に曲げる「きめだし」が1と4で観察できる。サビが少なければ他の個体でもきめだしが観察できるであろう。底部を表面側に曲げる「打ち返し」は不明確で、2は弱く打ち返しているかもしれない。大きさは分類図に示した。札の厚さは1.0~1.5mm前後で、8は下部がやや厚めである。

【鍼孔の列と数】鍼孔1列で、2孔×1列が多い。1類b種(2)と2類(8)は第3鍼孔を持つ3孔×1列になる。X線写真を撮影していないので、第3鍼孔が錆で隠れている場合があるかもしれない。2類と3類には、1類a種のように、第3鍼孔がない緒札を含むかもしれないが、はっきりしない。

【小札の重ね方向】肩甲(袖甲)の緒札である1類a種の個体(1)は右上重ねである。附属具の可能性がある2類(4)で右上重ねを確認できる。実際は左上重ねもあり、その痕が確認できないだけかもしれない。3類(9)は、裏面頭部の有機質からみて左上重ねか、または右上重ねの左端小札の可能性もある。

【鍼法】1類は鍼孔の外面に紐痕跡が残るが(2)、材質が革紐かどうかはつきりしない。鍼法の詳細がわかる資料はない。1類a種(1)と1類b種(2)は、各段鍼b類(清水1990・1993)で上下に連結するであろう。第6図左の肩甲復元図は鍼紐を列ごとに1条で復元したが、2条の場合もありうる。1類a種は緒札つまり最下段なので、下段へ連続する第3鍼孔がない。2類のうち第3鍼孔を確認できる8は各段鍼b類になる。2類の残りと3類は、現状で第3鍼孔を確認できない。第3鍼孔部分が破損し残っていない、あるいは錆で隠れている場合があるかもしれない。

【横紐法】小札の左右各2孔を使って、革紐で綴じる。1類は外面で縦方向(堅取)の綴紐痕跡がある(1)。2類は内面で巻葉状になる革紐痕がある(4)。

【下搦み】下搦孔は2孔ある。2類の小札は、下搦孔に革紐をラセン状に巻く(7)。孔の間隔からみて、下搦紐を2本ではなく1本使って巻くのだろう。これを参考にして、1類b種の小札もラセン巻に復元した(第6図左)。

【下縁覆輪・側縁覆輪】小札甲の附属具である肩甲(袖甲)の緒札である1類a種の下部中央にある1孔の覆輪孔を使って、下縁に革包覆輪を付けると推定できる。表裏両面の下縁に革包覆輪の痕跡が残る(1)。覆輪を縫い付ける紐は残っていない。第6図左下の縫紐は想定案の一例である。1類a種小札は、下縁に2孔の下搦孔も持つので、下搦紐をラセン状に巻いた上に覆輪をつけたのかもしれないが、1の下搦孔には下搦紐が残っていない。側縁覆輪が確認できる個体はない。

[1群の小札の観察]

1群1類a種(第4・5図1) 略称=偏円5.2下孔

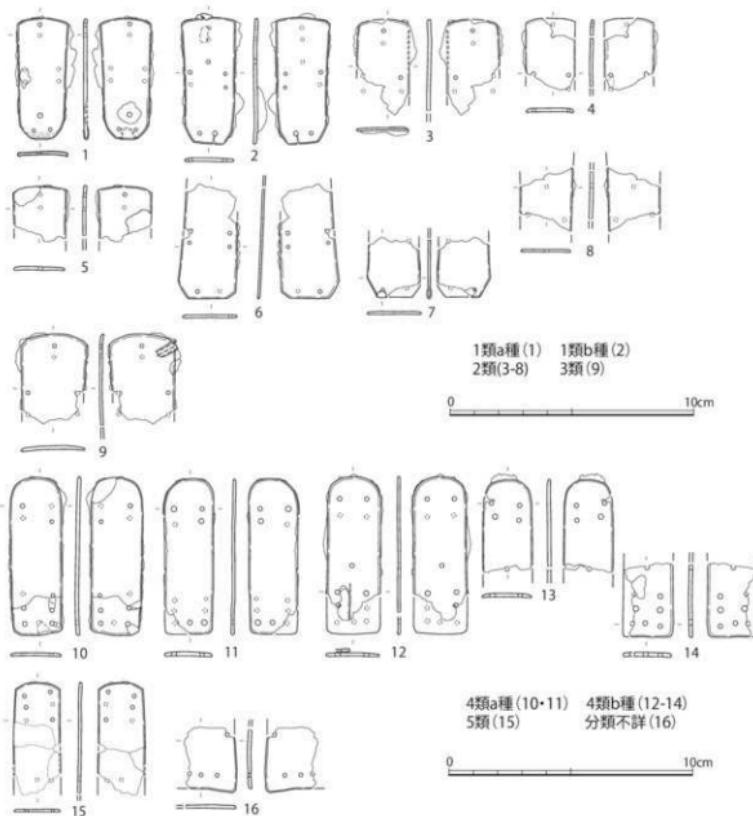
1類a種は、肩甲(袖甲)の最下段小札である。横幅21mm(上部)・18mm(下部)。下部中央にある覆輪孔は直径2mmで、下縁にある直径1.5mmの下搦孔よりも径が大きい。裏面の右側縁下部できめだしを観察できる。覆輪孔周辺の裏面が剥離破損する。内外面下端の革包覆輪痕と、表面左側縁に縦位に残る材質不詳の綴紐痕からみて、右上重ねである。1は1992年の『南河内町史』での報告番号12番で、重さ5.23g。

1群1類b種(第4・5図2) 略称=偏円幅2.1中央孔

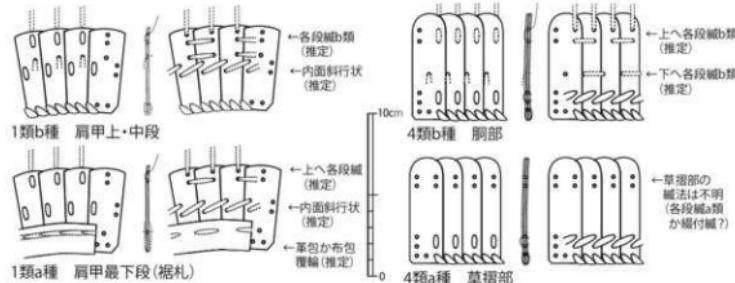
1類b種は、肩甲(袖甲)の上・中段小札である。横幅22mm(上部)・19mm(下部)。中央上部に第3鍼孔を持つ。材質不詳の綴紐痕が表面頭部に縦位に残る。2は1992年報告番号13番で、重さ7.31g。

1群2類(第5図3~8) 略称=偏円幅2.1

2類も附属具小札の可能性がある。上部横幅21mm(3~5)・下部横幅24mm(6・7)。X線撮影をしていないこともあって、第3鍼孔を確認できたのは8だけである。8は、1群2類か、2群4類b種か分類に



第5図 御鷺山古墳出土小札 (S=1/2)



第6図 御鷺山古墳出土小札の縫法・縫法 (S=1/3)

迷う破片で、側縁から縫孔までの距離が近い点から1群2類の破片と判断した。7は革紐の下端が残る。

3は旧報告25番で、残存重量5.01g。4は旧報告23番で、残存重量2.82g。5は旧報告20番で、残存重量2.75g。

6は旧報告16番で、残存重量4.76g。7は旧報告22番で、残存重量2.26g。8は旧報告24番で、残存重量2.85g。

1群3類(第5図9) 略称=偏円幅2.7

3類も附属具小札の可能性がある。上部横幅27mm。破損している下部に第3縫孔を想定できる(第3図)。9の裏面頭部右側には織維状の有機質が詰めている。9は1992年報告番号17番で、残存重量5.13g。

4 2群小札の特徴(第5図10~14、第4図10・12)

【小札の形状・大きさ】上縁は円頭形で、下縁は方形。縦断面形は、裏面方向に緩く反る「撓め」を持つ。裏面外周の「きめだし」や、底部を表面側に曲げる「打ち返し」は現状では認められない。大きさは小札分類図(第3図)に示した。札の厚さは1.0~1.5mm前後で、1群よりもわずかに厚めの傾向がある。2群には4類の他に腰札や帯札も存在したと考えるが、残存出土枚数が少なくて確認できない。

【縫孔の列と数】縫孔2列である。4類a種(10・11)は縫孔2孔×2列=4孔、4類b種(12~14)は縫孔2孔×2列+(第3縫孔)1孔=合計5孔である。

【小札の重ね方向】草摺小札の可能性がある4類a種(10)と、胸部小札の可能性がある4類b種(12)で、左上重ねを確認できる。右上重ねも行っているが痕跡が確認できないだけか、あるいは失われた小札に右上重ねがあったかもしれない。

【縫法】2群の縫紐の材質は不明である。縫法痕跡がわかる資料もないが、4類b種(12・13・14)は、第3縫孔があるので、各段縫b類(清水1990・1993)であろう。第6図右上は、縫孔1列あたり縫紐1条の案を想定して復元した。4類a種(10・11)は、第3縫孔がないので、各段縫a類または綴付縫と考えることができる(第6図右下)。

【横縫法】外面で縫方向(堅取)・内面で斜行状になるように革紐で縫じ、小札下位の左右各2孔を使う(10)。

【下端】下端孔は3孔ある。4類a種の小札は、下縁にある3孔の下端孔に、革紐をラセン状に巻く(10)。下端孔を1本使って巻いているのか、2本を使ってそれぞれ1孔とびに巻いているのかは、よくわからない。

【下縁覆輪・側縁覆輪】Ω字型摺札のような、最下段の小札が出土していないので、下縁覆輪の状況は不明である。失われた小札に、下縁覆輪をつける摺札があったと推定できる。側縁覆輪は確認できない。

[2群の小札の観察]

2群4類a種(第5図10・11) 略称=円頭6.4中央無孔

第3縫孔がない小札を、小札甲の草摺部に使う可能性が高い(清水1990, p.371; 清水1993, p.17)。長さ64mm(11)~65mm(10)、横幅21mm。10の革縫紐と下端孔(第4図10)は、上の【縫法】と【横縫法】の項で説明した。10の裏面頭部左上は剥離破損している。10の下端部破片が旧報告18番で、10全体の重量は7.17g。11は旧報告9番で、残存重量7.36g。

2群4類b種(第5図12~14) 略称=円頭6.4中央孔

第3縫孔があるので、小札甲の胸部に使う可能性が高い(清水1990, 清水1993)。推定復元長64mm、残存長は最大で59mm(12)、横幅21mmで、12は最大幅22mmの部分がある。12は旧報告10番で、残存重量6.24g。13は旧報告14番で、残存重量3.55g。14は旧報告19番で、残存重量2.51g。

	縫孔2列円頭形小札（小札甲の本体）			縫孔1列偏円頭形小札（小札甲の附属具）		
埼玉県 小針鎧塚						
栃木県 石橋横塚						
千葉県 城山1号						
栃木県 御観山						
群馬県 割地山						

第7図 2列円頭形の小札甲に1列偏円頭形の小札附属具が伴う事例 (S=1/4)

5 その他の小札など（第5図15～16）

3群5類（第5図15）略称＝偏円幅1.9

偏円頭形で鍼孔2列の小札はこの1点だけしか認められないので、用途や部位もよくわからない。鍼孔が3孔×2列の可能性がある。15の破片下部は、記入した2孔だけしか確認できず、縫孔を含む可能性があるが不明確である。15は旧報告15番で、残存長45mm、幅19mm、残存重量3.46g。

詳細不明の破片（第5図16）

16はあまり小札ふうに見えない遺物破片である。背の地板破片などであるのかどうかも、はつきりしない。旧報告の21番で、残存長27mm、残存幅22mm、残存重量2.38g。

6 位置づけ、組み合わせの性格

【位置づけ】御鷺山古墳の小札甲は、鍼孔2列5孔の小札を胸部に使う富木車塚型か金鈴塚型（清水1993）の可能性が高い。小札幅が狭いので、その新段階に該当し、後期第4段階に位置付けられる（内山2006・2021）。

【分布】北関東西部の栃木・群馬や埼玉北部では、胸部鍼孔6孔の小針鎧塚型が多くて、胸部鍼孔5孔の富木車塚型と金鈴塚型は少ない。群馬県伊勢崎市古城稻荷山古墳に後期第3段階の富木車塚型がある（東京国立博物館1983）。胸部鍼孔5孔の型式は、東海から東関東、つまり静岡・神奈川から千葉・茨城県域に多い（田邊2020、内山2019b・2021）。

【製作者】胸部鍼孔の数が、工人集團に対応する可能性が議論されている（清水1990, p.15; 田邊2020, p.28）。一方、胸部鍼孔5孔と6孔の差ではなくて、鍼法で類型を認識して製作集団を推定する作業も進められている（横須賀2021, p.347）。孔数は小札製作、鍼法は甲の組立てという、それぞれ別の側面を反映するのかもしれない（内山2021, p.163）。御鷺山の小札甲は、草摺部の鍼法が不明である。草摺が各段鍼a類であれば横須賀のAll類型、草摺が複付鍼ならばAIII類型になる。

【組み合わせ】御鷺山古墳では、倭系の小札甲（2群）に、外来系の小札附属具（1群）が伴う。日本列島で古墳時代中期後葉以後に定型化した倭系の鍼孔2列円頭形小札を小札甲本体に使い、古墳後期第2段階（須恵器のMT85段階-TK43型式期、6世紀後葉；内山2006）に朝鮮半島から導入した外来系の鍼孔1列偏円頭形小札を附属具に使う組み合わせであろう。

このような事例を、横須賀論（2011, pp.15-17, 18）や初村武寛（2018, p.63）が検討している。

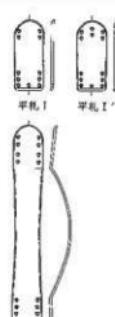
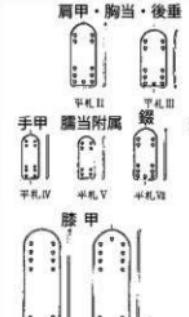
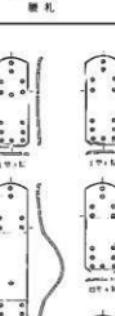
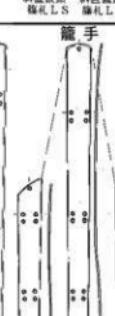
横須賀（2011）は、鍼孔1列偏円頭形小札の附属具について、千葉県城山1号墳と群馬県割地山古墳で膝甲、埼玉県小針鎧塚古墳で上幅の広い小札が肩甲と推定・報告されていることを紹介・指摘した。鍼孔2列の小札甲に、鍼孔1列の小札附属具が伴う例として、城山1号・割地山・小針鎧塚古墳のほかに、大阪府峯ヶ塚古墳と福島県山崎9号横穴墓を挙げた。

初村（2018）は、鍼孔1列の小札が襟状頭甲（襟甲）とともに朝鮮半島系であることを指摘し、鍼孔1列小札の肩甲を意図的に偏重したと考えた。「肩甲の可能性の高い小札を挙げていくと、鍼孔1列小札が多いように思われる……（中略）……襟甲が元々朝鮮半島などで用いられていたもので、それに伴う肩甲が鍼孔1列であったことに起因するのだろうか。そういう痕跡を残しているのであれば、意図的に小札肩甲を偏重した事例として興味深い。」「日本列島内の襟甲付肩甲の編年観としては、小札肩甲導入後の円頭威孔1列→日本列島内定型化後の円頭威孔2列→6世紀の新式甲冑導入時の偏円頭威孔1列という流れが想定される」

と述べている。

倭系の鍼孔 2 列円頭形小札を小札甲本体に使い、外來系の鍼孔 1 列偏円頭形小札を附属具に使う古墳後期後半の代表的な事例を第 7 図に示す。小針鑑塚は甲賀編年（内山 2006）の後期第 2 - 第 3 段階、石橋横塚・城山 1 号墳は第 3 段階、御鷺山・割地山は第 4 段階に相当する。後期第 4 段階の埼玉県小見真親寺古墳でも、1 列偏円頭形と 2 列円頭形の小札甲に、1 列偏円頭形附属具の肩甲や篠状鉄札が伴う（末永 1934）。1 列偏円頭形小札の残存出土数が 1 片だけの福島県山崎 9 号横穴墓（横須賀 2011）や茨城県赤羽 B-1 号横穴墓（鈴木・片平 1987）の場合には、小札の転用・流用・修理を考えることもできる。

御駿山古墳の外來系附属具小札には、小形で下幅が狭い肩甲小札（1類）のほかに、鍼孔1列偏円頭形の大形小札（2類と3類）がある。この大形小札は、小針鏗塚・城山1号・割地山の事例に対比できる。小札

甲の本体に使う小札	附属具の小札	附属具の襟状札・縦長板
<p>縫孔2列凸頭形 大阪府長持山古墳 (古墳中期後葉)</p>  <p>平札 I 平札 II</p> <p>縫札</p>	<p>肩甲・胸当・後垂</p>  <p>平札 III 手甲 胸当附属 鎧 平札 IV 平札 V 平札 VI 腰甲 平札 VII</p> <p>0</p>	<p>胸当</p>  <p>縫札</p>
<p>縫孔1列偏凸頭形 奈良県藤ノ木古墳 (古墳後期後葉)</p>  <p>平札 I 平札 II</p> <p>縫札</p> <p>0</p>	<p>肩甲 最下段</p>  <p>肩甲 手甲 腰甲? (本体と同形同大の小札)</p> <p>0</p> <p>腰甲? (本体と同形同大の小札)</p> <p>0</p> <p>胸当附属</p>  <p>縫札</p> <p>0</p>	<p>胸当</p>  <p>縫札</p> <p>0</p> <p>縫手</p>  <p>縫札</p> <p>0</p>

第8図 本体と附属具に同種小孔を使う組み合わせ (上は2列円頭形 下は1列偏円頭形 S=1/4)

上段：塙本敏夫 1997 「長持山古墳出土挂甲の研究」『王者の武装』 京都大学総合博物館

下段: 清水和明 1990 「挂甲と付属具」 斑鳩藤ノ木古墳 第一次調査報告書 斑鳩町・斑鳩町教育委員会

の総数や全体構造がわからない中で、不確実ではあるが推測するなら、御鷺山古墳でも大形小札の附属具に膝甲を含む可能性がある。

古墳中期からすでに定型化している倭系の小札甲とともに、外来系附属具の肩甲や膝甲も着用する組み合わせには、どのような背景があるのだろうか。(1) 倭系と外来系の小札製作者が後に存在し、それぞれ甲や附属具を供給していた〔=製作者集団の違い・渡来系工人〕。(2) 倭製小札甲に舶載附属具を組み合わせる流通や使用が行われていた〔=輸入品や対外関係〕。(3) 外来系附属具使用者の、朝鮮三国時代の社会に関わる軍事的役割を反映する〔=使う人物の性格〕……など、多様な解釈が考えられる。倭系の2列小札甲に、朝鮮半島系継長板冑を組み合わせる事例がしばしばみられること(内山2019a, 内山2020)と共通する背景があるかもしれない。外来系1列幅円頭小札武具の倭製化は後期第2段階の藤ノ木古墳例(第8図下)からすでに行われているので、倭製品と舶載品の区別を検討しながら、これらの問題を考えてゆく必要がある。

おわりに

御鷺山古墳出土小札は、市町村合併前の南河内町教育委員会の依頼により、栃木県埋蔵文化財センターで車塚哲久氏が鋸除去を行った。資料を調査・報告できたのは、下野市教育委員会、山口耕一氏、石橋町星宮神社の御協力による。また、報告文について横断研究会の皆様から御意見をいただいた。御協力をいただいた方々に御礼を申し上げます。

(参考・引用文献)

- 秋元陽光 2015a 「歴土分析から見た栃木の埴輪2 栃木県南部における大型古墳の埴輪」『栃木県考古学会誌』第36集 栃木県考古学会 宇都宮, pp.103-116
- 秋元陽光 2015b 「歴土分析から見た栃木の埴輪」『埴輪研究会誌』第19号 塩輪研究会発行 小金井, pp.19-36
- 内山敏行 2004 「第4節 古墳時代2遺物(11)武具」『千葉県の歴史』資料編 考古4 千葉県発行, pp.832-843
- 内山敏行 2006 「古墳時代後期の甲冑」『古代武器研究』第7号 古代武器研究会 彦根, pp.19-28
- 内山敏行 2011 「栃木県域南部の古墳時代馬具と甲冑」『しもつけ古墳群・下野の霸王・吾妻ノ岩屋から車塚へ』壬生町立歴史民俗資料館 生牛(栃木県下都賀郡), pp.58-64
- 内山敏行 2019a 「衝角付冑と2列小札甲・古墳時代甲冑のセット関係」『和の考古学—藤田和尊さん追悼論文集—』ナベの会考古学論集 第1集 ナベの会 調所, pp.175-184
- 内山敏行 2019b 「大刀・甲冑・馬具からみた関東と東海東部の首長墓」『駿河山古墳と東国首長』季刊考古学別冊30 雄山閣 東京, pp.65-78
- 内山敏行 2020 「錦貫觀音山古墳の甲冑と附属具」『錦貫觀音山古墳のすべて』群馬県立歴史博物館 高崎, pp.173-179
- 内山敏行 2021 「後賀中割遺跡8号墳の小札甲と関連資料」『後賀中割遺跡(TG007遺跡)』公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第698集 渋川, pp.162-167
- 小森哲也 2015 「東国における古墳の動向からみた律令国家成立過程の研究」六一書房 東京, pp.57,68,69,107
- 齋藤恒夫 2000 「栃木県の前方後円墳ノート2-御鷺山古墳の外形復元」『栃木県考古学会誌』第21集 栃木県考古学会 宇都宮, pp.91-100
- 佐藤涉 2019 「しもつけの大型古墳と須恵器甕・古墳時代終末期の埴丘儀礼」『栃木県考古学会誌』第40集 栃木県考古学会 宇都宮, pp.79-95
- 清水和明 1990 「挂甲と付属具」「挂甲」『斑鳩藤ノ木古墳 第一次調査報告書』斑鳩町・斑鳩町教育委員会(奈良県生駒郡), pp.43-82,362-375
- 清水和明 1993 「挂甲・製作技法の変遷からみた挂甲の生産」『甲冑出土古墳にみる武器・武具の変遷』第33回埋蔵文化財研究集会 宮崎, pp.13-27



写真1 御鷺山古墳出土小札 (左:表面 右:裏面)



写真2 御鷺山古墳出土小札の細部痕跡

- 末永雅雄 1934『日本上代の甲冑』岡書院 東京, pp.44, 104, 108-110, 298-299, 第47図, 図版33, 37, 42
- 鈴木裕芳・片平雅俊 1987『赤羽横穴墓群・B支丘1号墓の調査』日立市教育委員会 日立, pp.39-42
- 田代隆・小森哲也 1984『横塚古墳』『石橋町史』第一巻 史料編(上) 石橋町(栃木県下都賀郡), pp.56-108
- 田邊凌基 2020『古墳時代後期の小札甲にみる地域性-鍼孔2列5孔型小札の導入の様相-』『遡航』第38号 東京, pp.21-30
- 東京国立博物館 1983『東京国立博物館団版目録』古墳遺物篇(関東II) 東京, p.44
- 栃木県考古学会編 2016『「とちぎを掘る-栃木の考古学の到達点-」随想合 宇都宮, pp.163, 183
- 初村武寛 2015『東大寺金堂鉢道具挂甲残闕を再考する』『国宝 東大寺金堂鉢道具 保存修理調査報告書』東大寺 奈良, pp.263-272
- 初村武寛 2018『小札式甲冑の研究史と導入・展開期の諸様相』『古代武器研究』Vol.14 古代武器研究会・山口大学人文学部考古学研究室 山口, pp.47-76
- 広瀬和雄 2019『第7章 古墳時代の「国境」 第2節「山陽道」の政治センター (3) 兵站としての東国』『前方後円墳とはなにか』中公叢書 中央公論社 東京, pp.370-380
- 船山政志・塙田良道 1991『小針鎧塚古墳の挂甲』『行田市郷土博物館研究報告』第2集 行田, pp.1-30
- 南河内町史編さん委員会(山ノ井清人・水沼良浩) 1992『御鷺山古墳』『南河内町史』史料編I 考古 南河内町発行(栃木県河内郡), pp.461-493, カラーポジ 18-20
- 谷津浩司・坂庭秀紀 2000『東矢島古墳群(割地山古墳)』『市内遺跡』XVI 太田市教育委員会, pp.3-48
- 横須賀倫達 2011『山崎横穴古墳群出土小札甲の調査と研究』『福島県立博物館紀要』第25号 会津若松, pp.3-23
- 横須賀倫達 2021『仕様と系列から後期型小札甲を考える』『古墳文化基礎論集』古墳文化基礎論集刊行会 富田林, pp.343-352
- 若狭徹 2018『東国における後期古墳の特質・前方後円墳の終焉-』『境界の考古学』日本考古学協会 2018年度静岡大会実行委員会編集発行 静岡(同 2021『古墳時代東国の地域経営』吉川弘文館 東京, pp.279-295に再録)

研究紀要 第30号

発行 公益財団法人 とちぎ未来づくり財団
埋蔵文化財センター

〒329-0418

栃木県下野市紫474番地

TEL 0285(44)8441(代表)

FAX 0285(43)1972

HP : <http://www.mai'bun.or.jp>

発行日 令和4(2022)年3月30日発行
印 刷 株式会社 泰明グラフィクス
